



他人に「受け止められる」経験のはじまり

園長 野中 泉

今年の4月も、新入園児たちの盛大な泣き声が響く嬉しいスタートでした。普段はあまり保育に入らない私をはじめ他の事務室メンバーも泣く子を抱っこしたりおんぶしたりしながらテラスをウロウロと歩いている朝の光景に、在園児の先輩お母さんたちが「ああ、今年も始まったね」「4月だね～」と嬉しそうに声をかけてくれるのも毎年恒例、保育園の春です。

初日から全身で怒って真っ赤になって泣いたるかちゃんの泣き声は、歴代のアトムの中でも3本の指に入りそうな大きな声です。しかも、大概の赤ちゃんは休み休み泣く（泣きの合間に一瞬泣き止む間がある）のに、彼女は2時間泣きっぱなし、誰が抱いても「許さないぞ」と泣き疲れて寝むる以外は一貫して大音量の怒り泣き。ところが、入園して数日たったある日、その日も朝から2時間泣きのるかちゃんだったのですが、突然泣くのをやめました。抱きあげてもらったわけでもなく、おもちゃであやされたわけでもないのに、まさに「自分でやめた」がふさわしくピタッと泣くのをやめた彼女は、あっけにとられる私たちを無視して突如そこにあったおもちゃで遊び始めました。「もう、いいやどうせ泣いたって状況は変わらない」とあきらめたのか、「ごはんも美味しいし（泣きながらもごはんは食べていた）、おもちゃもあるし、ここも悪くないわね」と思ったのかは、まだおしゃべりができない彼女は教えてくれません。でもその日以来2時間泣きは封印し、私たちの顔をみて笑顔まで見てくれる、それもまた不思議です。

ゆうい君は、お引越しで転園してきた1歳児です。小さい頃から別の園で保育園生活をしていたという彼。入園前の視診（面談）ではお父さんもお母さんも「集団生活には慣れているので、何も、心配していません」と言いました。「泣かないと思うんですけど、やんちゃでよその子にけがさせないか心配です」とご両親。ご両親の言葉どおり、初日からお別れのときにも泣かずバイバイと自ら手を振って、貴禄のお別れ。ところが二日目、盛大に泣く子たちの受け取りに気をとられていた私たちがふと後ろを振り向くと、ゆうい君が声も出さずひとりポロポロと涙をこぼしているではありませんか。「ああ、心配だつたよね。みんな泣いてるもんね」と手を伸ばすと私にひしとしがみつき、そのまま静かにポロポロと泣き続けるゆうい君のシクシク泣きはそれから何日か続きました。こちらも「慣れていたのは前の保育園で、ここは初めてだよ」なのか「みんながあんまり泣くから、ぼくも悲しくなってきたよ」なのか、彼の心の全てはわかりません。彼らふたりだけでなく、泣く赤ちゃんたちは誰ひとり、何で泣いているのか言葉で説明はできません。でも、小さな彼らが、精一杯に小さな心を揺らしてこの大きな生活の変化を受け止め、その不安や納得いかない初めての「気持ち」を、それぞれの個性あふれるやりかたで、精一杯に表現しようとしていることは、ひしひしと伝わってきます。

泣き方もそれなように、泣き止むタイミングもそれぞれです。ベテランの保育士もこうすれば泣く子は全員泣き止ませられるというような「万能な秘策」を持っているわけではありません。ただ泣き続ける子たちに、保育士たちは「嫌だったね」「悲しいね」「怒ってるんだね」と受け止めながら声をかけます。抱き上げ背中をポンポンしたり、ゆっくりバギーを押してつきあいながら「ほら、見ていいお天気だよ」「お兄ちゃん、お姉ちゃん遊んでるね」と声をかけ続けます。もちろん、すぐには泣き止みません。でも不思議なもので、どんな子も、この4月の終わる頃には、それぞれのペースでひとり、またひとりと泣き止んでいくのです。

保育士に抱き上げられて泣き止む姿やあやされ笑顔を見せる姿、その腕に抱かれて安心してミルクを飲む姿、親ではない他人が差し出すスプーンに大きく口をあーんと開けたり、トントンと背中を叩いてもらって眠りにつくようになるその変化、に、毎年胸が熱くなります。親以外の誰かに「受けとめられた」経験を支えに、子どもたちがそれぞれの小さなはじめの一歩を踏み出そうとしている場面から、今年も保育園の毎日がはじまります。